

第1章

介護福祉士ファーストステップ研修における 指導の要領について

1

指導の要領の使用にあたって

1 ファーストステップ研修のめざすもの(研修の理念)

ファーストステップ研修は、基礎的な業務に習熟した介護職員が、的確な判断、対人理解に基づいて利用者の尊厳を支えるケアを実践し、小規模チームのリーダーや初任者等の指導係として機能できる技術を身に付けられるように開発されたものです。

ファーストステップ研修では、介護職員の能力向上を達成するために、3つの領域を定め、それぞれの領域で学ぶべき事柄を以下のように設定しています。

1) 「ケア」領域

小規模チームのリーダー的な職員として、的確な判断、対人理解に基づく、尊厳を支えるケアが実践できるよう、以下の事項を学ぶ。

- ・利用者の全人性、尊厳の実践的理解と展開
- ・介護職の倫理の実践的理解と展開
- ・コミュニケーション技術の応用的な展開
- ・ケア場面での気づきと助言

2) 「連携」領域

小規模チームのリーダー的な職員として、介護過程の適切な管理、他職種、家族、地域との連携によるチームケアが推進できるよう、以下の事項を学ぶ。

- ・家族や地域の支援力の活用と強化
- ・職種間連携の実践的展開
- ・観察・記録の的確性とチームケアへの展開

3) 「運営管理基礎」領域

小規模チームのリーダー的な職員として、サービス管理・運営管理の基礎となる知識や方法を学ぶため、以下の事項を学ぶ。

- ・チームのまとめ役としてのリーダーシップ
- ・セーフティマネジメント
- ・問題解決のための思考法
- ・介護職の健康・ストレスの管理
- ・自職場の分析

上記の事項を学ぶために具体的にどのような科目構成として研修を実施するかについては、研修実施団体が創意工夫できる仕組みとなっています。しかし、現在までの試行事業においても、具体的な授業シラバス(授業展開例)が必要だといったご意見が出されてきました。こうしたご要望に応え、具体的な科目編成にあたって研修実施団体の参考としていただくため、今回は、ファーストステップ試行事業のなかで実施されてきた科目構成に従って、科目ごとのシラバスを示すこととしました。ここに示したシラバスはあくまで例示であり、これを強制するものではありません。効果的に研修を実施していくためのひとつの構成例としてご覧ください。

以下では、まずファーストステップ研修の授業を行うにあたって抑えていただきたい本研修の特徴と留意点についてふれます。そのポイントを抑えていただいたうえで、具体的な各科目のシラバスを参照してください。

2 授業展開にあたっての基本的留意点

介護福祉士ファーストステップ研修は、基礎的な知識や技術の学習だけでなく、介護現場に関連させて実践的に理解し、具体的に展開できるように現任者を育成することがテーマです。そのため、担当講師は各種理論、先行研究などについて講義形式で教授するのみならず、実践的な事例を教材として活用した演習を積極的に導入し、講義と演習がセットになった授業を展開していくことが重要になります。

ここでは、今までの試行事業のなかで行われた講義・演習(1日8時限)の記録などから、本研修がめざす学習活動や研修実施にあたっての留意点について整理していますので、参考にしてください。

1 ファーストステップ研修がめざす学習活動を促進する研修展開を工夫すること

ファーストステップ研修は、現任者を対象とした研修です。受講生一人ひとりの実践上の課題や悩みの解決につながる何らかの手がかりが得られ、専門職としての成長を助ける研修であることをめざしています。本研修を通じ、受講生がこれまでの実務経験のなかでできていたことに自信をもてることが第一です。一方で、成長の途上にある専門職として、自分自身の力量が不足している点や課題に気づき、学び続ける態度を常態化することが求められます。さらに、研修修了後もさらに上のキャリアに向かって成長し続けていくことができるような姿勢が身につくような研修である必要があります。

以上のような目標が達成できるように本研修を実施する研修実施機関においては、次の3つのポイントを重視した研修の展開をお願いしたいと思います。

① 自らの考えを振り返り、言語化する機会を提供する。

日々の仕事では、往々にして、業務遂行が優先となり、自らの仕事を振り返る機会をもつことは少なくなりがちです。また、疑問を感じながら仕事をしていても、それがなぜなのか、どこに起因するのかなど、未解決のまま職場内の話題にもしない場合があるといわれています。

そこで、本研修の講義・演習では、日々の援助の振り返りを通して、自分が今までどのような介護をしてきたのか、なぜそのように介護するのかについて言語化・整理・確認をし、他者にこれを説明できるような研修プログラムを工夫してください。それによって、専門職としての自覚や、判断の根拠の明確化、チームでのケアの方針の共有化、さらに後輩に指導できる実践力が身につくと考えられます。

② 演習を軸にグループ討議の体験を通し、コミュニケーション促進能力を伸張させる。

チームでケア業務を遂行するためには、チームリーダーは、自らの考えをもちながら、意見を押し付けるのではなく、メンバー一人ひとりの意見も聞き、場合によっては意見を引き出し、チームの話し合いを活性化させることが求められます。

そこで、本研修においては、演習にグループ討議を多く取り入れるようにしてください。グループ討議の体験が、チーム内での円滑な話し合いにもつながり、チームケアの実践にも影響を及ぼすと考えられるからです。

今までの試行事業の状況を見ても、実際に、受講生はグループ討議を通じて「質

問の仕方」「話の広げ方」「意見の引き出し方」「確認の仕方」「共有する内容の強調」「議論の促進の仕方」「協議がすすまない場合の原因分析」を体得し、チームリーダーとして求められるコミュニケーションを促進する能力を高めているといえます。

③ 専門的判断の根拠となる思考枠組みを獲得させ、実務と研修が循環するようにし、自発的に学ぶ態度を身につけさせることで、「知の統合化」を促す。

本研修を受けることで受講生が介護の専門職として、的確な判断力、分析力を身につけられるよう、研修機関は、専門的な判断のよりどころとなる「思考の枠組み」「分析手法」の教授を心がけることが大切です。

演習においては、自職場での課題を振り返る機会を設けたり、分析させたりすることで、実務と研修とが有機的に連動した、循環的な学習が促進されると考えられます（これらを本研修で得られる「知の統合化」と表現しています）。

さらに、可能であれば、自職場等での課題解決は、受講生一人が作業するのではなく、一部は職場のチームメンバーや、場合によっては利用者の協力を得て実践するような内容を設定することも考えられます。この自職場での課題解決はチームリーダーの養成に必要不可欠な経験となるほか、職場におけるコミュニケーションを促進させます。また、研修が対人援助職にとって、業務遂行上必要なことであるという理解を得るとともに職員の研修に対する協力姿勢を醸成する機会ともなります。

2 初回講義ではファーストステップ研修の理念、目標を説明すること

最初の講義・演習においては尊厳や倫理に関する科目が実施されることが多いのですが、初回は、受講生に対し「介護福祉士ファーストステップ研修」の理念や全体の目的ならびに自職場等課題を取り上げ分析する意味について説明し、受講生の理解を得るようにしてください。このことは、受講生の態度や意欲を促すうえで、きわめて重要であると思われます。

3 科目ごとに、同科目のねらい、到達目標について説明すること

上記2に関連して、講義・演習の冒頭に、各科目のねらいと学習による到達目標を説明するようにしてください。目標を明確にすることで、受講生の理解が得られやすくなります。

2

指導の要領

多くの研修実施機関においては、1科目につき1日8時限の集合研修が設定されています。そこで、1日・1科目の授業展開について、この3年間の試行事業を通して効果的と思われる授業の展開を以下で例示します。

あくまでも例示であり、本研修がすべての講師に対し統一した授業展開を求めることを趣旨として作成したものではないことにご留意のうえ、ご理解いただきたいと思えます。

「指導の要領」執筆担当委員

「ケア」領域

利用者の全人性、尊厳の実践的理解と展開	/ 森 繁樹・内田 千恵子
介護職の倫理の実践的理解と展開	/ 森 繁樹・内田 千恵子
コミュニケーション技術の応用的展開	/ 菊池 健志
ケア場面での気づきと助言	/ 佐藤 富士子

「連携」領域

家族や地域の支援力の活用と強化	/ 川井 太加子
職種間連携の実践的展開	/ 及川 ゆりこ
観察・記録の的確性とチームケアへの展開	/ 是枝 祥子

「運営管理基礎」領域

チームのまとめ役としてのリーダーシップ	/ 藤井 賢一郎
セーフティマネジメント	/ 羽山 政弘
問題解決のための思考法	/ 影山 優子
介護職の健康・ストレスの管理	/ 上之園 佳子
自職場の分析	/ 影山 優子

1 利用者の全人性、尊厳の実践的理解と展開

科目の目的	<p>利用者を全人的、共感的に理解し、人間観、人間の尊厳について実践経験に基づいて理解を深め、尊厳を支える視点を確立する。</p> <p>利用者の尊厳が損なわれている状況に自覚的になり、実践を改善することができるようになる。</p> <p>ICFの視点に基づき、利用者の生活全体を支えるためのアセスメント技術、介護計画の作成・評価の視点を確立する。</p>
-------	--

行動目標	<p>利用者の人生をも視野に入れた、「生活全体」をとらえる視点を確立する。</p> <p>利用者一人ひとりの歩んできた生活経験、その人の生活スタイル、心理・社会関係、地域を含めた生活環境など幅広い教養に関心を向けていくことをめざす。</p> <p>日常生活や介護サービス提供場面において、利用者の「尊厳」を尊重し、仮に「尊厳」が損なわれている状況があれば、それに気づき、改善を実践することができるようになる。</p> <p>介護施設等で生じがちな身体拘束が起こる背景や要因（利用者側・提供者側・相互関係）、問題点を言語化して説明し、適切な対応を検討することのできる視点を確立する。</p> <p>豊かな人間観と、利用者への全人的、共感的、多面的な理解に立ち、利用者の「尊厳」が保持された状態の実現に向けた実践の改善にチームで取り組むことができるようになる。</p> <p>介護職としての倫理・価値、及び介護職の援助のあり方について理解したうえで、医療サービス、家族や利用者本人の希望、あるいは制度との間で葛藤が生じる可能性や原因を理解し、適切な判断、説明、対応ができるようになる。</p>
修了時の評価ポイント	<p>利用者一人ひとりの生きてきた姿に興味・関心をもって、日常生活の支援としての介護サービスの提供にあたることができる。</p> <p>利用者の表情、ふるまい、言葉、環境とのかかわりなどから、利用者の身体面・精神面・社会面の状況や変化に気づき、言語化できるとともに、利用者にとってのより望ましい「生活」の実現に向けてチームとして取り組むことができる。</p> <p>さまざまな場面において、一人ひとりの利用者が何を求めているか、望ましいケアの方法は何か等について、多角的に考察したうえで根拠に基づき説明し、後輩等にも指導・助言できる。</p> <p>利用者の尊厳が損なわれている状況及び利用者の尊厳を損なうケアについて、また、利用者の尊厳が保持された状況及び利用者の尊厳を支えるケアについて、家庭での生活場面、介護サービスを受けるなかでの生活場面などに即して具体的に説明できる。</p> <p>身体拘束が起こる背景や要因及びチームとしての改善策について、事例に基づいて説明できる。</p>

指導の視点	<p>一人ひとりが個別的な存在である「人間」を理解していくため、常に自分自身に立ち返って利用者の思いや気持ちを考えられる姿勢を身につける。</p> <p>全人的、共感的理解のために必要な「心の働き」や「心の動き」について（自分自身、利用者、同僚や後輩等）意識化し、「心ない」介護サービスを提供することのないよう努めていく。</p> <p>介護専門職として認知症高齢者をはじめ、身体的・知的にさまざまな不自由を抱える要介護状態にある者の「尊厳」を積極的に守り、そのような者の「尊厳」が損なわれている場合には、積極的にその代弁を行うことができる。</p>
内容例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生活とは何か、生活支援とは何かを改めて検討し、介護職員の専門性について考える ・ ライフステージとしての老年期の特徴と発達課題の理解（生活歴、好み、つきあい等から、その人らしさ、その人らしい暮らし、関係性を考える。自分あるいは身近な人の延長線上で生活者として共感的に理解する）。また、自分の身近な人の人生・老いについてライフヒストリーなどで考えながら、ある利用者の人生や老いについて考える演習 ・ ICFの基本概念及び生活構造モデルとケアへの展開（単なるツールやアセスメントシートが使いこなせるだけではなく、尊厳や全人的な理解を形成する） ・ ICFの視点に基づくアセスメントについて、事例に基づく演習 ・ 「尊厳を支えるケア」及び尊厳が損なわれている状態の理解と、実践への展開、後輩等への助言等 ・ ビデオ等の教材から、尊厳が損なわれているケアと「尊厳を支えるケア」をピックアップし、課題と修正法について考える演習 ・ 尊厳を支えるケアの観点から、介護計画の作成とモニタリングについて、事例に基づく演習
事前課題例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 75歳以上の身近な人（親族、知人等）からその人のライフヒストリーを共感的に聞いたうえで、A4用紙2枚程度にまとめてください。 ・ 「尊厳を支えるケア」を考えていくうえで、ICFの視点がどのように生かされるのかについて、文献等を調べてA4用紙1枚～2枚にまとめてください。 ・ 自分が所属する以外の他福祉施設（高齢者、障害者、グループホーム等）を見学させてもらい、見学した施設の「良いと思う点」「課題があると思う点」を含めて、A4用紙1枚～2枚にまとめてください。

講義の展開例

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)・演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
15分	導入	科目の目的等	
45分	(講義) 生活とは何か 生活支援とは何か	改めて「生活とは何か」「生活支援とは何か」といったことを意識して理解させる	自らの「生活」等を振り返る 演習等も用いる
10分	(講義)	ライフステージとしての老いの特徴の再確認	生物学的観点のみならず、心理・社会的観点の重要性を理解する
50分	(講義) ライフヒストリー	自分に身近な人間(祖父母、特定の利用者等)を題材としてのライフヒストリーのもつ意味の理解	
100分	(演習) 生活障害とは	ICFの視点に基づき、「本人の状態」と「生活環境」から生ずる相互作用としての「生活障害」を理解する また具体的な事例を挙げてその改善等の可能性を探る演習を行う ICFの視点に基づくアセスメント、事例に基づく演習(「生活障害」とは「本人の状態」と「生活環境」との相互作用であることの再認識)	事例を用いる
100分	(講義) 尊厳について	「尊厳を支えるケア」が求められる背景、またその意味するところの理解 事例を用いて「尊厳を支えるケア」及び「尊厳が損なわれているケア」の実践的理解を促す	
50分	(演習) 介護計画の作成	「生活支援」「ライフヒストリーのもつ意味」「ICFの視点」「尊厳を支えるケア」等を総合的に勘案しながら、介護計画の作成の演習を実施する	
10分	まとめ		

2 介護職の倫理の実践的理解と展開

科目の目的	<p>チーム内の指導的な役割を担う介護職員として、福祉・保健・医療を巡る倫理の必要性について体系的に理解する。</p> <p>対人支援に当たる介護専門職として必要とされる価値・倫理基準に即し、利用者の立場に立って考えていく思考展開の姿勢を身につける。</p> <p>対人支援に当たる介護専門職としての価値・倫理基準に基づき実践的な判断を下したうえで、行動することができる。</p> <p>支援困難な利用者や困難な場面においても、自己の行った行為あるいは判断について、倫理的立場からも根拠をもって利用者・同僚や対外的に説明できる力を培う。</p>
-------	--

行動目標	<p>対人支援に当たる介護専門職として、普遍的な価値・倫理を理解するとともに、対人支援専門職に固有の価値・倫理のあり方を理解する。</p> <p>自分自身の「介護観」の振り返り、介護職の倫理観に基づき、客観的な視点をもって分析的評価を行える。</p> <p>「客観的な事実」と「自分の認識・価値付け」を区別して物事を捉えたうえで、自らの考えについては倫理的な観点からの判断も加えて説明できるようになる。</p> <p>普遍的な倫理のみならず、福祉・保健・医療を巡る固有の倫理について、体系的に学んでいくことができるようになる。</p>
------	---

修了時の評価ポイント	<p>対人援助職の倫理の考え方（倫理理論、倫理原則、道徳規則、倫理的判断のための基準、医療・看護分野の倫理、生命倫理等）についての概説を理解できる。</p> <p>介護職の価値・倫理に基づく支援と家族や利用者本人の希望、あるいは医療サービスや制度との間で葛藤が生じる可能性を理解したうえで、具体的な場面において介護職の倫理に基づき判断・説明することができる。</p> <p>介護福祉士としての倫理綱領、事業所の理念について、介護の実践場面においてどのように活かされるのか、具体的に説明できる。</p> <p>「生活支援としての介護サービス」の現場で行われる身体拘束がなぜ問題であるのかを倫理的な側面から説明することができ、併せてその改善策を検討することができる。</p> <p>虐待や身体拘束が起きている事業所・施設においては、職員間にどのような倫理的課題が生じているのかを理解し、併せてその改善策を検討することができる。</p>
------------	---

<p>指導の視点</p>	<p>「人を相手」とする対人援助専門職である介護福祉士にとって、自らの行動を律する「倫理」の重要性とともに、介護サービス提供現場において虐待や身体拘束等が生じる背景には「倫理観の弱さ」といったことがあることを理解する。</p> <p>「人の道」といった道徳的必要性だけでなく、介護福祉士には対人援助の専門職固有の倫理が必要であることを理解させる。</p> <p>「日本介護福祉士会倫理綱領」の意味するところを理解し、各条文に記されたことを日々の実践のなかで意識して、生かせるようになる。</p> <p>「倫理観」の欠如した介護実践にふれたとき、仲間や同僚等であっても利用者の立場に立って遠慮なく、的確に問題点の指摘ができる。</p> <p>特に、寝たきりや認知症高齢者等、自らの訴えを的確に行うことができない者に対する介護サービスの提供場面においては、介護職自身の「倫理観」が問われていることを自覚させる。</p>
<p>内容例</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対人援助職として踏まえるべき倫理についての考え方（倫理理論・倫理原則・道徳規則、倫理的判断のための基準、医療・看護分野の倫理、生命倫理）の理解 ・ 「倫理」が問われるケア場面における考え方と倫理の概念による整理（自分が「倫理観」をどの程度踏まえた行動をとっているか、いないかを認識する） ・ 障害者や社会的少数者に対する差別の歴史、あるいは戦争の際の残虐行為等の背景に、立場の弱い者につけこむ人間の「心の弱さ」があり、介護サービスが対象とする利用者とは、日常生活において他者からの支援を必要とする者である。それゆえ、こうした仕事のなかで自分の「心の弱さ」を自覚し、「弱さ」になびく自分を律するものが必要とされ、それが対人支援の専門職における倫理綱領の意味するところである。また、介護現場において安易な身体拘束や虐待といったことが生じる背景には、そうした人間心理があることを理解する ・ 実務面で直面する葛藤（「生」と「死」を援助する過程において、身体拘束、家族との葛藤、制度との葛藤、職場との葛藤等）場面について、利用者や家族とのやりとりの場面を設定したロールプレイなどを通して、どのような考え（基準）で判断したのかを説明させる演習（思考プロセスを考える） ・ なぜ職業として介護職を選んだか、介護職を続けているか、自分自身と介護のかかわりなど、自分自身が考える介護観を言語化・文章化し、介護がめざすもの、プロとしての姿勢などを議論する ・ 日本介護福祉士会倫理綱領の具体的な討議。例えば「利用者本位、自立支援」について、自職場の具体的な介護場面でどのようなことを考え、討議していく ・ 自らの言葉におきかえて倫理規定を作ってみる演習
<p>事前課題例</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本介護福祉士会初任者研修のテキストの第 1 章を読み、自分なりに理解した介護福祉士の倫理の必要性について、A 4 用紙 1 枚～2 枚にまとめてください。 ・ 新聞等において過去に起きた介護や福祉現場での虐待事件等を調べて、なぜそのようなことが起きたのか、またそうした事業所・施設で働く職員には倫理面からどのような課題があると思うのかについて、A 4 用紙 1 枚～2 枚にまとめてください。 ・ 介護職の価値・倫理に基づく支援と家族や利用者本人の希望、あるいは医療サービスや制度との間であった葛藤について、実際にあった事例をまとめるとともに、振り返って今どのように考えているかを A 4 用紙 1 枚～2 枚にまとめてください。

講義の展開例

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)・演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
60分	(講義) 人の生活のなかで、なぜ倫理が必要か	人間社会における一般的な倫理についての理解 人間社会における倫理の必要性	パワーポイントや資料 事例やビデオ 立場の弱い者につけこむ人間の「心の弱さ」を理解し、こうした対人支援の仕事のなかでは、一般社会以上に倫理が重要であることを理解する
60分	(講義、演習) 介護福祉士の役割と専門性 グループ討議	「生活を支援する」介護とは何かを理解する	
60分	(講義、演習) グループ討議	介護福祉士の役割についてあらためて考えさせ、倫理の重要性に気づかせる	
30分程度	福祉・保健・医療分野の倫理	他分野の専門職の倫理について説明する	パワーポイントや資料
30分程度	介護福祉士の職業倫理	日本介護福祉士会倫理綱領について説明する	日本介護福祉士会倫理綱領
60分程度	(演習) グループ討議	介護職の価値・倫理に基づく支援と、医療サービス、家族や利用者本人の希望、制度との葛藤が起きる可能性について、事例に基づいて検討 具体的な介護場面での実践について理解させる	パワーポイントや資料 ビデオ

3 コミュニケーション技術の応用的な展開

科目の目的	<p>コミュニケーションにかかわる基礎的な知識・技術を概観し、それが介護実践場面で応用できることを学ぶ。</p> <p>意識化されにくい自己のコミュニケーション特性について認識をはかり、その影響や効果、留意点を理解する。</p> <p>介護が、多様な言語的・非言語的コミュニケーションの総合力として提供されていることを理解する。</p> <p>個々の介護対象の特性を踏まえて、コミュニケーション技術を実践展開できる力を身につける。</p>
-------	---

行動目標	<p>利用者、家族や職場内、他機関と適切なコミュニケーションをとり、信頼関係を醸成できる。</p> <p>「講義を通して身につける技能・スキル・知識」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニケーションにかかわる基礎的な知識・技術 <ul style="list-style-type: none"> 例 言語的コミュニケーション・非言語的コミュニケーション 社会的比較、態度の類似性とバランス理論、好意の返報性 など ・ 自分自身のコミュニケーション特性を客観的にとらえるスキル <ul style="list-style-type: none"> 例 交流分析、エゴグラムなどによる自己理解 考えを伝える、他者の考えを推測、確認するなどの場面に対するリフレクション技法 など ・ 日常の実践場面におけるコミュニケーション上のさまざまな課題を認識し、分析、評価するための方法の理解 <ul style="list-style-type: none"> 例 入浴、食事、アクティビティなどの生活（介護）場面、家族との会話などに分けて、特徴的に生じやすいコミュニケーション特性を分析、評価するなどの事象の構造化理解 <p>利用者の表情、ふるまい、言葉、環境とのかかわりなどから、利用者の身体面・精神面・社会面の状況や変化に気づき、言語化できるとともに、利用者にとってのより望ましい状態の実現に向けてチームで取り組むことができる。</p> <p>「講義を通して身につける技能・スキル・知識」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 対象特性を踏まえた非言語的コミュニケーションの応用展開技術 <ul style="list-style-type: none"> 例 対象特性（高齢者、障害者、認知症）疾病や障害により生じるコミュニケーションの上の混乱にかかわる知識 知覚（視聴覚等）認知能力の低下、社会的関係性、防衛反応 など ・ 気づきと言語化をうながすコミュニケーションの客観化の手法 <ul style="list-style-type: none"> 例 逐語記録、プロセスレコード、ロールプレイなどの展開とその意義の理解 <p>適切な身体介護や非言語コミュニケーション（言葉かけ、視線、立ち位置など）のあり方を理解し、実行するとともに、後輩等に指導できる。</p> <p>「講義を通して身につける技能・スキル・知識」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 対象特性や実際の介護場面に応じたコミュニケーションの応用展開
------	--

	<p>例 介護体験やロールプレイなどを通じたコミュニケーションの実践応用 ・コミュニケーションについての考えの整理と説明の手法 例 論理的思考法、説明の技法 など</p>
<p>修 了 時 の 評 価 ポ イ ン ト</p>	<p>自身のコミュニケーションの特性を理解する客観的視野が醸成されている。 実際の介護場面のなかで自身のコミュニケーションを振り返り、信頼関係を形成できる。 より適切なコミュニケーションのあり方について、言語化して説明できるようになる。 さまざまな場面において、コミュニケーションの観点から、利用者が何を求めているのか、望ましいケアの方法は何か等について、多角的に考察できる力を身につけている。 介護場面で生じるコミュニケーションの実際について、自身の考えを根拠をもって後輩等に指導・助言できる説明力を体得している。 (エピソードの記録等を用いて現実場面に基づいて説明する)</p>

指導の視点	<p>コミュニケーションにかかわる基礎的な知識・技術は広範であるが、主要な理論や例を紹介することで、意識化されにくい“コミュニケーション”を客観的にとらえられるようにする。</p> <p>特に自分自身のコミュニケーション特性は意識化されにくいいため、受講者相互による体験的な演習とそのフィードバックなどにより、自己のコミュニケーション特性について認識をはかれるようにする。</p> <p>また、その際、自分自身のコミュニケーションの特性が、日常の介護実践場面にも大きな影響を与えていることに気づかせるよう示唆を与える。</p> <p>事前課題などを活用し、実践場面での自分自身を振り返れる場面を提供することが効果的である。</p> <p>それらの過程から、介護自体が多様な言語的・非言語的コミュニケーションの総合力として提供されていることを理解できるようにすすめていく。</p> <p>介護対象がもつ多様なコミュニケーション特性を踏まえて、介護することが重要であることを示唆する。介護体験などの手法を通じて、介護を受ける側の立場から気づきを促すなどが効果的である。</p> <p>認知症高齢者とのコミュニケーション場面は、介護対象のもつコミュニケーション特性を意識した介護実践を理解するうえで典型的な例となる。ただし、認知症高齢者の介護だけが、特別なコミュニケーションであると誤解を生じないように配慮が必要である。</p> <p>全体として、内容が広範におよぶため、知識・技術を網羅的に提供することに終始すると、応用力展開にまで到達できなくなるので留意が必要である。</p> <p>知識・技術についての解説は要点を絞り込み、それらを例示として活用しながら、実際の介護場面におけるコミュニケーションの理解や実践展開に結び付けるところまでを一連の内容として構成するとよい。</p> <p>コミュニケーション場面は、上司や同僚、他職種とのコミュニケーションなども含まれるが、当該内容は「職種間連携の実践的展開」などの他の科目に譲る。</p>
内容例	<ul style="list-style-type: none"> ・ ロールプレイとコミュニケーションに着目した振り返り 場面や対象を設定した簡単なシナリオロールプレイによりコミュニケーション場面への内省と観察を体験する 場면을演じることで、自己の体験としてコミュニケーションをとらえられ、知識や技法を実践と結び付けることをねらう 方法 <ul style="list-style-type: none"> ・ 具体的な介護、業務、他職種連携場面などのコミュニケーション場面を再現したシナリオを用いてロールプレイを演じさせる ・ 短時間でよい。演じた後すぐに振り返りを行い感想を共有する 役割を交換しコミュニケーションの双方向性を体験したり、良い展開例と悪い展開例を対比させて演じてみるなどの展開を行うとよい ・ 事例を活用した対象特性の理解とそれを踏まえた技法の習得 認知症や障害者、ターミナルケアの対象者等、特性に配慮したコミュニケーションが求められるものについて、事例を検討することで特性に応じたコミュニケーション技

	<p>法の意味と展開の実情を学ぶ</p> <p>対象特性を一般的な知識として理解するだけでなく、その置かれた状況との関連性のなかでとらえることで、場面や状況に影響を受けるコミュニケーションを体得する方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象特性がコミュニケーションのあり方に影響を与えている典型的な事例を準備し、これについてグループで分析検討を行う ・事例情報は、学習のねらいとなる特性や事象に焦点化して作成する ・ビデオ映像などを活用すると、よりリアリティをもって事例を提示できる ・対象特性の理解とコミュニケーションの技法の効果とを結び付けられるようワークシートなどを用意して学習を支援してもよい <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションに関するエピソードについて、学習した内容をもとに後輩等への指導や助言を想定した解説演習を行う <p>実際に説明することで、学習内容の言語化と定着をはかる</p> <p>方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習した内容で説明が可能なエピソードを用意し、これについて、どのように解説したらよいかをグループで検討する ・エピソードは、事前課題等から選定してもよい ・説明自体がコミュニケーションの形態であることの自覚を促す <p>想定する説明対象は、後輩、上司、他の専門職、利用者、家族などにバリエーションを広げてもよい</p>
事前課題例	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に体験した優れた（困惑した）コミュニケーションのエピソードを教材化し、解説させる。 <p>コミュニケーションを対象化してとらえることで関心をもち、学習効果を高める。身近な体験を教材化することで学習内容の実践的展開をはかる。</p> <p>方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート等により場面や対象の特定、関心の焦点化などを支援する。 ・教授者は、事前分析により、課題意識の傾向を把握し、主要な関心・場면을解説の例示に用いるなどにより講義との連動性を図り学習モチベーションを引き出す。 ・事後課題と連動させることで学習効果を明確にする。 <ul style="list-style-type: none"> ・実際の介護場面や同僚との会話の逐語記録・プロセスレコードを作成する。 <p>コミュニケーションを記録することで、客観的に理解し、気づきをうながす効果があることを理解する。</p> <p>方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・逐語記録は、沈黙やつぶやきなどの言語以外の要素も含めさせることで非言語への関心をうながす。 ・プロセスレコードの場合は手法解説により、事象の客観化を支援する。 <p>教材として演習などに活用する場合は個人情報の管理に留意すること。</p>

講義の展開例

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)・演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
30分	事前課題 導入	身近なエピソードをあげて考察することで課題への関心を高める。 日常的なコミュニケーションは意識化されにくいいため、効果的に学習が深まるよう導入する。	コミュニケーションを意識したアイスブレイクなどを実施することで主体的な学習参加を促す。
60分	講義	コミュニケーションにかかわる基礎的な知識・技術の解説	
60分	演習	事前課題等を活用し、日常的な体験を素材にコミュニケーションがどのように展開されているかを話し合うことで、コミュニケーションを対象化することと、自己の特性を意識化する。	基礎的な知識・技術についての理論や体系的な理解を深めたいうえで、それを実際の体験と結びつけることを支援する。
30分	講義	介護の対象、場面、内容特性に応じたコミュニケーションの技法や実践例などの例示と解説	
120分	演習	介護場面を想定したロールプレイとその観察などの演習を通じて、コミュニケーションにかかわる知識・技術を実践に結び付けて応用する。	介護実践の対象や、場面特性をとらえたコミュニケーション技法を理解し、体験する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 対象、場面ごとにさまざまな展開が考えられる。多様な対象、場面をあげ(例 認知症高齢者介護)、この部分を実践応用として膨らませて、別日程で構成することも可 </div>			
30分	講義	学習した内容のまとめと言語化、説明解説の手法などについて解説。	学習した内容を言語化し、自ら解説することで定着をはかる。概念と事象を結びつけた説明力を身に付ける。 日常的な実践場にひきつけて学習した内容を再構成する。
30分	演習	実践場面におけるよりよいコミュニケーション技法の実践などについて事例などを活用して解説してみる。	
	事後課題	学習した内容を踏まえて、具体的なコミュニケーションにかかわるエピソードについて解説させる。事前課題とリンクさせると学習内容が明確になりやすい。	

4 ケア場面での気づきと助言

科目の目的	<p>どのような状況にある利用者に対しても、その場で利用者の言動に自分のもつ見る力、聞く力、コミュニケーション力を生かしながら対応し、行動できるようにする。</p> <p>自分のケアを過信し、日々変化する利用者の感情や思考に気づかず一方的なケアをしていないか、自己の実践を分析する能力をもつ。</p> <p>小グループにおけるチームリーダーとして、職場環境および利用者の状況から課題に気づき解決できる。</p>
-------	---

行動目標	<p>自分自身のケアを、利用者の表情、振る舞い、言葉、利用者間、職員等の人的及び構造等の物的環境の視点で客観視し、利用者の状況や変化への気づきについて分析し、言語化することができるようになる。</p> <p>日常のケアを振り返り、気づきながら行うケアを再確認することができるようになる。</p> <p>気づくケアを行うことにより、利用者への自立支援、尊厳のあるケアにつながることを意識化することができるようになる。</p> <p>気づくことと意図的に観察することの関係を意識化し、観察技術を確立する。</p> <p>実務のなかで介護の専門職として達成感の残っている事例を挙げ、達成感と気づきとの関連について分析し、介護の仕事の深み、楽しさを見つめなおし、自らのキャリア形成について考えることができるようになる。</p> <p>日課となっている決まりきった業務（ルーティンワーク）をする職員がいた場合を例に、チームリーダーとして、望ましい指導のあり方を考えることをめざす。</p> <p>危険予知トレーニング（KYT）を行うことで、チームワークや感受性を高め、メンバーで危険を発見し、対策を考え実行することができるようになる。</p>
------	--

修了時の評価ポイント	<p>介護職としての気づきとは何かについて説明でき、気づける介護職に必要な知識を列挙できる。</p> <p>達成感の要因になっている気づきについて、自身のケアを通して概説できる。</p> <p>チームリーダーとして後輩等への指導・助言の方法について説明できる。</p> <p>指定された課題に沿って自分の考えを制限文字数内で表現することができる。</p> <p>グループ討議において「会を進める」「方向性をただす」「非言語の部分を見て、気づかいをする」「人の意見を膨らます」「まったく違う方向から議論を見る」「タイムマネジメント」の役割のなかで、自分の役割を認識できている。</p>
------------	---

指導の視点	<p>ディスカッションにどのような態度で臨んでいるのか、相手の意見をどう聞いているのかを把握する。</p> <p>「気づきとは何か」を各自が意識しながら、自分の考えをまとめて発言する技術を示唆する。</p> <p>他者の体験から得ることも大きいことを意識させる。</p>
内容例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 気づきとは ・ 介護職に必要な気づきと感性について ・ 利用者の心身の状況への変化に気づくために必要な知識（利用者の表情、振る舞い、言葉、利用者間同士、職員と利用者間との関係を含む） ・ 利用者の生活する場の環境が利用者の変化に影響を与えることに気づくために必要な知識（建物の構造、居室、トイレ、お風呂、床、採光、騒音、臭い等） ・ 認知症ケアでの気づきのポイント ・ イラストを用いた危険予知トレーニング（KYT）について ・ ルーティンワークとは何か ・ チームリーダーとして求められるコミュニケーション促進能力とコーチング
事前課題例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今までの実務経験で達成感の残っている事例について、利用者の状況やケア場面を具体的に挙げ、自己の言動を含めてその理由を述べてください。 ・ ルーティンワークといわれる仕事について、職員例を挙げその仕事内容と課題についてあなたの考えを述べてください。 ・ 「気づきのある介護」と「気づきのない介護」は職員のどのようなケアを見て判断しますか。身近にある例であなたの考えを述べてください。

講義の展開例

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)・演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
60分	(講義) 気づきとは 介護職として気づかなければならないことについて	気づきは知識と経験によって成り立っていることを説明し、ケア場面での気づきの定義について、講師としての考えを述べる 利用者の心身の状況の変化に気づくために必要な知識(利用者の表情、振る舞い、言葉、利用者間同士、職員と利用者間との関係を含む) 利用者の生活する場の環境が利用者の変化に影響を与えることに気づくために必要な知識《建物の構造、居室、トイレ、お風呂、床、採光、騒音、臭い等》	参加している職員が、「気づき」は知識と経験から成り立っていることを意識できるようにする 専門職として、利用者の日々の生活のなかで変化する心身の状況の変化に気づくことが重要であることを意識させるようにする
90分	(演習) グループワーク	実務経験で介護職(個人、またはチーム)として達成感の残っている事例を発表し、専門職としての達成感の利用者の心身状況に気づき、それに沿って介護が提供されたときに発生することを学習する	<ul style="list-style-type: none"> 各自が持参した事前課題を使用 講師は事前に内容を把握し、良い例とあまり良くない例を挙げ、受講生に何が違っているのかを意識させる 達成感の有無の検討にならないように注意する
30分	プレゼンテーション	グループで話し合った内容について発表する	事前に発表者を決める
60分	(演習) グループワーク 気づかないこと によって起こる 利用者への負担 を考える	無意識に行っていることはないかを問い、KYTを行うことでチームワークや感受性を高め、メンバーで危険を発見し、対策を考え実行することの重要性に気づかせる	<ul style="list-style-type: none"> イラストを用いたKYTを実施する 発表者が同じ人にならないように注意する
60分	プレゼンテーション 質疑応答	討議した内容について発表	発表の準備時間を提供する

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)・演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
120分	<p>(演習) 認知症ケアのポイント</p> <p>(講義) チームリーダーとして求められるコミュニケーション促進能力とコーチング</p> <p>まとめ</p>	<p>認知症ケアの一般的な知識を受講生がもっていることを前提に投げかける(発問を多くする)</p> <p>認知症のある利用者への気づきの困難と重要性について意識してもらう</p> <p>介護職に必要なコーチングを概説する</p> <p>ティーチングとコーチングを用いてチームリーダーとして助言ができる</p> <p>改革する気が薄い現状維持(ルーチンワーク)タイプ、時間がないと言いながらも改革する気持ちをもつ積極的なタイプへの助言</p> <p>高齢者への介護では個別的なケアが求められ、介護の質は介護を提供するまでの過程で、画一的な介護サービスを提供するのではなく、個々の高齢者の状態や周囲の状況に気づき、判断をして実施することを求められていることである</p>	<p>ここでは認知症のあるペーパーユーザーを用い、受講者が共通の事例から気づきに必要なたことを抽出できるようにする</p> <p>(認知症の人のDVDから把握するのもよい)</p> <p>ティーチング、コーチングについての資料を配布</p> <p>まとめでは講師が自己の実務経験のなかで培ってきた気づきについて語る</p>

5 家族や地域の支援力の活用と強化

<p>科目の目的</p>	<p>利用者と家族の双方の想いや葛藤を理解し、適切な対応ができるようにする。</p> <p>利用者や家族の潜在的な希望や意欲も引き出せるようにする。</p> <p>利用者と家族が豊かに生活するうえでの友人・知人・家族会などの大切さ・意義を理解し、調整できるようにする。</p> <p>地域の民生委員やボランティアなどと利用者・家族をつなぎ支援に役立てることができる。</p> <p>介護を提供していくなかで、必要時にソーシャルワークの技術を活用したかわりや働きかけを行うことができるようにする。</p>
--------------	---

<p>行動目標</p>	<p>利用者の生活全体を支える生活プランの視点に立ち、アセスメント、介護計画の策定及び援助内容や介護計画の評価が行えるようになる。</p> <p>介護を通してソーシャルワーク的な視点をもってかわりを行い、利用者や家族の自覚されていない/失っている希望や意欲も引き出すことができるようになる。</p> <p>家族がもっている力を引き出し、家族と協働して利用者・家族の自分らしい生活を支援できるようになる。</p> <p>利用者・家族に関する地域の支援力を把握し、インフォーマル資源の限界、特徴を踏まえ、適切な支援のネットワークを形成し利用者の生活を継続できるような支援ができるようになる。また多職種と連携し、新たな資源について提案することができるようになる。</p>
<p>修了時の評価ポイント</p>	<p>家族が自らの思いに気づかない、また言葉にできない思いをどのように引き出すことが可能かについて、事例に基づいて具体的に説明できる。</p> <p>介護家族の心理を理解するために必要な視点について事例に基づき説明できる。</p> <p>利用者やその家族を取り巻く地域状況等を踏まえて、地域の社会資源のエコマップ等を作成・活用しながら話し合い、その成果を事後課題のレポートへ反映させることができる。</p> <p>不足している社会資源について新たな資源開発の提案ができる。</p>

<p>指導の視点</p>	<p>介護家族の現状と課題を理解できるような内容にする。</p> <p>家族のニーズを理解するためにどのようなアセスメントの視点が重要か理解できるような内容にする。また、家族の潜在的な希望や意欲を引き出せるような支援を行うために必要な専門性について考えられる内容にする。</p> <p>家族の支援力を評価し、家族だから発揮できる支援の有効性、活用できる支援の可能性について考えられる内容にする。</p> <p>地域の資源の評価（フォーマル資源・インフォーマル資源）とその活用方法、公的支援の有効性を踏まえつつ、公的にはないインフォーマルの支援のよさとその限界を知り活用することができるような内容にしていく。</p> <p>家族、知人、会社関係、ボランティアなどとのネットワークを持っているか、それが利用者の生活・意欲をどのように支えているか等について考えられる内容とする。また、施設で生活する人の場合、何があれば在宅での生活を続けられたか事例を通して考えられる内容にする。</p> <p>事例を用いた演習により、地域資源とのネットワークづくりについて考えられる内容にする。</p>
<p>内容例</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家族介護者の心理について解説するなかで、家族構成やそれぞれのライフスタイルの変化等にもふれる。また、在宅で介護をしている家族と施設入所者の家族、それぞれの介護の特徴的な事例などについても視聴覚教材等を利用して支援を考える ・ 本人、家族介護者のニーズアセスメントの視点について、アセスメント指標を用いて説明する。次に簡単な事例を提示し、アセスメントから課題を導き出す作業を行う ・ 家族の介護力を評価する視点を説明し事例を用いて実際に評価の視点をし、家族だから発揮できる支援の有効性と家族がリフレッシュできているかについても評価に含む ・ 地域の支援力の評価と新たなものの開発に向けた取り組みについては、地域の資源の評価（フォーマル資源・インフォーマル資源）とその活用方法について公的支援の有効性を踏まえつつ、インフォーマル支援のよさとその限界を知り活用することができるような内容にしていく ・ 地域資源とネットワークづくりでは、各自の事例をエコマップを通して整理し、地域資源とのネットワークづくりについて考えられる内容にする。また日ごろから、地域との関係づくりを行っておくことの必要性を伝える
<p>事前課題例</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分達の地域にある社会資源（フォーマル・インフォーマルを含め）の状況を調べる。 ・ 実際の援助事例（ない場合には一番かかわりが多い身内、友人等）について支援内容（かかわりの内容）を簡素にまとめて提出。 <p>【記載内容：利用者・家族の抱えている問題・悩み・支援内容・経過等】</p>

講義の展開例

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)・演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
10分	導入	講師紹介 本日の流れの説明	
60分	(講義) 家族介護者の心理の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家族介護者の心理状況(葛藤やストレス等)と生活障害について ・ 家族支援とエコマップ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイント、資料事例を用いてエコマップを説明する ・ 各自が持ってきた事例をもとにエコマップを作成してもらう
90分	(講義) 家族介護者のニーズ把握と支援方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 利用者や家族が自らの思いに気づかない、また言葉にできない思いをどのように引き出すことが可能かについて ・ エンパワメントの視点、ストレングスの視点について 	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイント、資料 ・ DVDや新聞記事等
60分	(講義) 家族の支援力の評価と支援力の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最近の家族介護の現状について ・ 家族の支援力とは ・ 在宅で生活する要援護者の家族の支援力の活用 ・ 施設で生活する要援護者の家族の支援力の活用 ・ 家族支援力のアセスメントの視点 ・ 家族の支援力を活用した支援について 	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイント、資料 ・ 事前提出した事例が活用できているか
120分	(演習) 家族介護者の支援方法についてのグループワーク	各自の事例を用いてエンパワメントの視点、ストレングスの視点を活用した支援について考え、グループに分かれて各自のものをもとに討議する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイント、資料 ・ 最近の新聞記事等
90分	(講義) 地域の支援力の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域とは ・ 地域の支援力とは ・ 地域との連携の意義・必要性 ・ 在宅で生活する要援護者の地域支援力の活用 ・ 施設で生活する要援護者の地域支援力の活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイント、資料 ・ 事前課題で調べた社会資源を各自で確認してもらいながら進める

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)・演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
60分	(講義) 新たな資源の調整と開発	<ul style="list-style-type: none"> ・ フォーマル・インフォーマル資源の種類と活用方法 ・ 新たな資源の開発方法 ・ アドボカシー(代弁者としての役割) ・ 地域資源とネットワークづくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイント、資料
120分	(講義) 各自の事例を分析する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現在の仕事のなかでの家族や地域の支援力、地域の支援力の活用状況について各自の事例を分析する ・ 各自で分析したものをさらに、グループに分かれてさらに必要な支援は何か、地域資源とのネットワークづくり等について検討する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 受講生自身の事例をもとに行う(事例がない人のために事例を用意しておく) ・ 事例の見直しのなかで、これまでの講義を受けて、専門性の観点から、知識や技術が統合化されて、必要な介護が導き出され、言語化されているか
	まとめ		

6 職種間連携の実践的展開

科 目 の 目 的	<p>介護職の役割とは何かを認識させる。</p> <p>介護職の視点とは何かを認識させる。</p> <p>チームケアにおける介護職の専門性を活用できる。</p> <p>職種間・職員間と連携して行うチームケアの実践方法を理解させる。</p>
行 動 目 標	<p>介護職員の役割・視点は何かを説明できるようになる。</p> <p>介護職としての役割・視点に基づき、他職種と連携してチームケアの実践をめざす。</p> <p>ケアプランの評価を通し、チームケアの効果を検証できるようになる。</p>
修 了 時 の 評 価 ポ イ ン ト	<p>介護職の役割、視点について説明できる。</p> <p>看護職等の他職種の役割や業務内容、チームケアにおいて介護職員が実践する内容や、視点について、事例に基づき説明できる。</p> <p>申し送り、急変、事故、家族への連絡などの場面を想定した事例に基づき、チーム（他職種を含む）ケアにおいて、何を観察、報告、連絡、相談すべきかについて具体的に説明できる。</p> <p>ケアプランにおける評価の際に、チームケアの効果、チームケアの不足が検証できる。</p>

指導の視点	<p>生活場面のなかで細かな言動や、環境、時間の経過などの情報を取ることを、介助や見守りを通して実践していることを認識させる。</p> <p>24時間の施設介護のなかでの職員間連携（引継ぎのあり方）を検証させ、生活援助の視点の把握と個別対応の継続の方法を、現状の整理とあわせ、理解させる。</p> <p>24時間の一部分の在宅介護サービスの提供を通して、他サービスの内容、役割を把握し、連携の実践を行うことで期待される効果と現状の課題を整理させる。</p> <p>ケアプランの評価を通し、他職種の活用と介護職の役割の実践を振り返り、チームケアの効果と課題を検証する。</p>
内容例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 介護職の役割・視点について理解させる 生活場面での細かな状況把握 身体的なケア、メンタルケア、環境整備、介護者へのケア ・ 介護の現場での職員間の連携、及び他職種間との連携について、理解させる ・ 日本介護福祉士会方式のアセスメントを理解させる（生活7領域から捉える） ・ グループワーク 担当者会議等の実際を持ち寄り、情報の授受に関する課題を抽出する どのような連携が必要で、実際どのような状況なのかを事例を用いながらディスカッションする ターミナルケアでの連携について検討する ・ ロールプレイ 医師や看護師への申し送りや急変時の対応について サービス担当者会議 ・ 連携の実践を通して、期待される効果を事例を通して挙げてみる ケアプランの評価を通し、チームケアの効果と不足を検証する
事前課題例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日頃行っている担当者会議やケースカンファレンス等の議事録を1つ選び、チームで検討した内容（問題点）やサービスを提供したことで解決した内容などを分析し、レポートする。また残った課題や違う方法でのサービス提供などをチームケアの実践を意識して考え、まとめる。 ・ 現在行っている担当者会議やケースカンファレンス等について、問題点や実践状況をまとめる。 ・ 介護職の役割とは何かをまとめる。

講義の展開例

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)、演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
60分～90分	(講義) 介護職の役割と視点	介護職の役割・視点とは何かを認識させる ・ 身体的なケア、メンタルケア、環境整備、介護者へのケアの実践 ・ 生活場面での細かな状況の把握 ・ アセスメントシートの活用	日本介護福祉士会方式のアセスメントケアプラン
60分	(演習)	チームケアにおける介護職の専門性を活用できる グループワーク ・ 申し送りの実際と課題をまとめる ・ ターミナルケアでの連携について検討する	
90分	(講義) 介護の現場での職員間の連携及び職種間の連携について	職種間・職員間と連携して行うチームケアの実践方法を理解させる ・ 24時間介護の施設サービスと24時間の中の一部の在宅介護サービスのそれぞれの生活の継続について	
60分～90分	(演習)	グループワーク ・ 担当者会議等の実際を持ち寄り、情報の授受に関する課題の抽出を行う	
60分～90分	まとめ	・ 連携の実践を通して期待される効果を挙げてみる ・ ケアプランの評価を通し、チームケアの効果と、課題を検証してみる ・ まとめ	実際に使用しているケアプラン及びモニタリング票

7 観察・記録の的確性とチームケアへの展開

科 目 の 目 的	<p>知識や技術に基づいた介護過程の展開を言語化でき、計画に沿った介護行為を適切に記述できるようにする。</p> <p>不十分な記録の背景にある、不十分なかかわりや不適切な介護過程について指摘できるようにする。</p> <p>記録の意義、機能、方法について、後輩等に指導できる。</p>
-----------------------	---

行 動 目 標	<p>知識や技術に基づいた介護過程の展開を言語化でき、計画に沿った介護行為を適切に記述することが、日々の業務で実践・活用できる（知識の獲得、技法の活用）。</p> <p>的確な記録により情報の共有ができ、適切なチームケアの実践ができ、利用者の個別性に応じた介護を提供できるようになる。</p> <p>記述した介護記録が、カンファレンス時の資料として活用できるようになる。</p> <p>具体的な介護記録からの的確な介護の提供を保證することができ、介護の専門性を積み上げることができるようになる。</p> <p>記録の意義、機能、方法について、後輩等に指導できるようになる。</p>
修 了 時 の 評 価 ポ イ ン ト	<p>視聴覚教材を用いた事例から、介護過程の理論に基づいて展開できる。</p> <p>具体的な記録例について、不十分な点を指摘し、その背景にある不十分なかかわり・不適切な介護過程を指摘できる。</p> <p>介護過程を展開するための、観察と記録の意義を事例をとおして説明でき、具体的に記述できる。</p> <p>実践している事例の記録を活用して、再度介護過程の展開をとおして振り返り、的確な記録になっているか確認できる。</p> <p>介護記録の重要性を再確認し、自職場で活用・実践できる。</p>

<p>指導の視点</p>	<p>知識として介護過程を理解し、説明できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 介護過程の構成要素を説明できる。 ・ アセスメント、知識や技術の統合化ができ、必要な介護を導き出し、計画の作成ができる。 ・ 計画に沿った実践、記録の一連を説明できる。 ・ 介護記録から、なぜその介護行為が行われたかというプロセスを根拠に基づいて説明できる。 <p>技能として、具体例にもとづいて介護過程の展開が的確にできる。</p> <p>視聴覚教材をもとに、日常生活の場面から利用者の状況や状態を観察し記述、その記述から知識や技術を統合化し、必要な介護を導き出し一連の介護過程を言語化し、それに基づいた計画の作成、介護実践、記録として記述ができる。</p> <p>自分で記載した事例を用いて、何を観察したか、何を記録したか、不十分な観察・記録は何か。</p> <p>観察をとおして、介護過程に基づいた記録になっているか。</p> <p>記録の機能・考え方を説明し、具体的に記述できるように。</p> <p>不十分な記録の背景となっている、不適切な介護過程を振り返ることの必要性。</p> <p>記録が、適切な介護を提供した証拠になり、見えない介護を可視化し、介護職員を守ることにもなり、利用者からの苦情や訴訟などの場合の証拠にもなることの重要性の確認。</p>
<p>内容例</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 視聴覚教材をもとに、利用者の日常生活や介護サービスの様々な場面において、観察の項目・視点・記録にどのように記述するかを考え、介護過程の展開を行う ・ 事前に提出した記録から、介護過程を含めてグループで共有し演習 ・ 現在使用している記録様式を持ちより、何を記録しているのか、どのようにするとよい記録になるのかを話し合い、自職場の記録のあり方を考え、自職場での実践方法を模索する <p>知識として、記録の必要性を理解し、説明できる</p> <p>技能として</p> <ul style="list-style-type: none"> * 根拠に基づいて記録することができる * 意図して記録することができる * 行った介護を可視化できる
<p>事前課題例</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実践している介護場面の介護過程とその記録を 1200 字でレポートしてください。 ・ 見守り場面の具体的な援助方法とその記録を様式にそってレポートしてください。（事例概要、具体的な援助方法、記録）

講義の展開例

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)・演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
90分	(講義) 介護記録の基本 視点 観察・記録の意義	<ul style="list-style-type: none"> 介護過程を展開するうえでの、観察と記録の意義 なぜ記録を書くのか 専門性に基いた介護実践を提供していることの確認 介護職として、記録から介護過程を振り返り、観察すべきポイント、記録にすべき内容 記録の機能、方法について 	<ul style="list-style-type: none"> パワーポイント、資料 介護過程を展開するうえでの、観察と記録の意義を確認する
90分	(講義) 介護過程の展開	<ul style="list-style-type: none"> 視聴覚教材を用いて日常生活や介護場面から、利用者の様子を観察し、介護過程を展開する 観察したこと、統合化したことを記述する 生活支援の視点の気づき 	<ul style="list-style-type: none"> 専門性の観点から、知識や技術が統合化されて、必要な介護が導き出され、言語化されているか
120分	(演習) 事例に沿って記録の仕方を検討する	<ul style="list-style-type: none"> 介護過程に基づいた実践から介護職の行為、利用者の様子の把握、観察・解釈・判断したことを言語化 知識や技術の統合化を説明 根拠に基づいた記録として言語化できる 言語化することの難しさと記録の重要性 	<ul style="list-style-type: none"> 事前に提出した事例を予め講師が選んでおき、それをグループで演習として活用 円滑な演習になっているか 討議のポイントが適切か
60分	(プレゼンテーション) 観察の視点と記録	<ul style="list-style-type: none"> 観察・解釈・判断が知識や技術を統合した記述、根拠のある介護記録になっているか確認 今後の記録の書き方の理解 	<ul style="list-style-type: none"> 発表 コメント 観察の視点、知識や技術が統合化されているか 介護過程の展開は的確か
40分	まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 観察の視点と記録 記録は適切な表現であったか 用語の使い方の検討 	<ul style="list-style-type: none"> 援助計画の目標と連動した記録になっていたか 記録の重要性について理解できたか
20分	振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 本日の振り返りと事後課題について説明 	

8 チームのまとめ役としてのリーダーシップ

科目の目的	<p>リーダーシップおよびそれに関連する理論（リーダーシップ理論、集団・グループに関する理論、コーチング理論等）を、基礎理論に従って理解する。</p> <p>演習（自分自身の特性の理解、状況設定リーダーシップの演習等）により、基礎理論を理解し、リーダーシップをよりよく発揮するきっかけをつかむ。</p> <p>リーダーシップを発揮する状況や背景を理解し、身につけておく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の組織のなかで、自分やチームが期待される役割・責任を明確化して、組織のなかでの自分の「動き」を意識できるようになる。 ・尊厳を支える個別ケアに関する理解とテクニカルスキルの習得に基づき、自分自身の役割を理解する（ケアする人をケアする）。 ・法制度や時代背景のもと、組織のなかでの自分自身の役割を理解する。
-------	---

行動目標	<p>介護現場、特に小規模チーム、ユニットのリーダー及び初任者等の指導者として、自分の所属するチーム・組織の与えられている役割・責任・課題を理解するとともに、自分が組織全体のなかで期待される役割・責任を自覚する。チームのまとめ役としての役割・責任を自覚し、よりよいチームワークの展開を確立する。</p> <p>後輩等の働きがいや自主性、自律性を高め、適切なリーダーシップを発揮することができる。リーダーとして専門職にとって必要とされる知識提供と技能指導ができるようになる。</p> <p>より質の高いサービスとするために、限られた人員・財源・時間等の資源を効率的・効果的に活用しようとする姿勢をもち、常にチームの業務の見直しを行うことができるようになる。</p>
------	---

修了時の評価ポイント	<p>リーダーシップ論やリーダーのタイプについて概説し、自分自身のリーダーシップについて分析し説明できる。</p> <p>具体的な事例に基づき、リーダーがどのように行動すべきかについて考え、その結果を説明できる。リーダーとして、介護サービスにかかわる専門的知識をもち、チームで尊厳を支援する個別ケアが実践できる。</p> <p>自分が組織内で期待されている役割・責任について説明し、それにどの程度応えられているか、またその役割・責任に応えるために取り組むことについて説明できる。チームのまとめ役として業務と役割について分析・考察ができ、説明ができる。</p> <p>介護をとりまく社会情勢、環境といったマクロの視点から入り、自施設の現状を振り返ると同時に、リーダーシップの理論的理解と現場でのかかわりをそれぞれの受講生がイメージし、日々の業務におけるチームのまとめ役としてのあり方を考察できる。</p>
------------	---

指導の視点	<p>全員参加の討議やグループワークによって、小集団でのチームアプローチ、リーダーシップのポイントについて理解させる。</p> <p>リーダーとリーダーシップの違いを理解させるとともに、リーダーシップ理論を知識としてだけでなく、介護業務の実際の体験と結びつけ学習する。</p> <p>リーダーシップの特性理論や状況対応理論を、演習等で具体的に理解させ、自分のリーダーシップの特性や状況に応じた適切な対応をとれるようにする。</p> <p>リーダーとして求められる介護に対する理解やテクニカルスキルについても、自覚するよう促す。</p>
内容例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 講義：基礎理論 <ul style="list-style-type: none"> * リーダーシップの基礎理論を講義する。状況に応じたリーダーシップのあり方（教示的リーダーシップ、説得的リーダーシップ、参加的リーダーシップ、委任的リーダーシップなど）について講義する * 集団の理論、チーム、コーチング、リーダーに求められるコミュニケーション（交流分析やジョハリの窓）の基礎理論について講義する ・ 講義：介護の組織・リーダーのあり方 <ul style="list-style-type: none"> * リーダーシップとは組織運営にとって、また、職務遂行上必要な役割であることへの理解ができるように講義をする * 組織から期待される職場のリーダーの仕事、組織全体を見る目、上司の立場の理解などを、配置図・組織図にもとづいて、自分の職務・役割を意識できるようにする * 職種間（とくに介護・看護間）の調整的役割を理解できるように講義する * 介護をとりまく社会情勢、環境といったマクロの視点を理解する * チームリーダーとしてケアの方針・方向性を定めていくための視点を学ぶ ・ 演習例 1： <ul style="list-style-type: none"> *（自分自身の）リーダーシップスタイルを理解・イメージするための演習 * 状況対応別リーダーシップを、介護の具体的場面に対応した形式で理解するための演習 ・ 演習例 2（事前課題にもとづく演習）：事前課題にもとづき、参加者のリーダー観を明確にし、リーダー観について話し合い、全体会で発表する
事前課題例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分が今まで出会った「良いリーダー」と「悪いリーダー」について、具体的にどんなところが良かったかをまとめる。 ・ チームとしての業務上のつまずき、悩み事、困難事例等をつまづき、そのことへの対応するかについて、 <ul style="list-style-type: none"> 「チームリーダーとしての課題」 「その課題を解決する為には、どのような事が必要か」 「課題を解決するためのリーダーのあり方」 についてまとめる。 ・ リーダーとしての悩み、課題」について自職場で抱えるリーダーとしての課題を明らかにし、リーダーがどのように行動すべきか考える。 ・ リーダーに必要な態度、知識、技術について、職場で他の職員にインタビューを行い、さらに自分の意見を付け加えてまとめる。

講義の展開例

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)・演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
60分～ 120分	(講義) リーダーシップの基礎理論と関連理論	<ul style="list-style-type: none"> ・ リーダーシップとリーダー ・ リーダーシップ論の系譜(オハイオ研究、PM理論、コンティンジェンシー理論、変革型リーダーシップ) 	パソコン(パワーポイント)、プロジェクタなど
60分～ 120分	(演習) リーダーシップ理論を理解するための演習	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分のリーダーシップの理論 ・ 状況対応別リーダーシップの実際 	演習の教材等
120分～ 180分	(演習) 事前演習にもとづいた演習		ホワイトボード、ポストイットなど
60分	まとめ		

9 セーフティマネジメント

科 目 の 目 的	<p>介護における安全とは何かを理解する。</p> <p>安全配慮義務に向けての取り組みをシステムとして構築できる。</p> <p>事故が発生してからの対処（分析、環境改善、対応、解決）ができる。</p>
行 動 目 標	<p>セーフティマネジメントの基本的視点を理解し、自職場における課題と解決方法の分析ができるようになる。</p> <p>業務を進めるうえでのリスクを多面的に評価し、ケアを展開できるようにする。</p> <p>セーフティマネジメントの方法を理解・推進し、事故発生時にチームのまとめ役として適切に行動できるようにする。</p>
修 了 時 の 評 価 ポ イ ン ト	<p>セーフティマネジメントの体制の具体的な内容について説明できる。自職場におけるセーフティマネジメントの課題とその解決法について分析できる。</p> <p>介護事故や感染症、ヒヤリ・ハットの事例の収集・分析法を説明できる。</p> <p>介護事故やヒヤリ・ハットがあった場合の対応について、事例に基づき具体的に説明できる。</p> <p>介護の質の向上がセーフティマネジメントにつながることを説明できる。</p>

指導の視点	<p>事例に基づき介護事故の予測、介護事故の原因分析と再発防止策（住環境と福祉用具の活用等を含む）の立案を行うことができる。</p> <p>事例に基づき、介護事故の分析手法（SHELモデル、4M 4E方式、根本原因分析）を演習し、リスクへの気づきを高める視点を学び、事故発生時の対応に関するシミュレーション、事故対応に関する技術向上を修得させる。</p> <p>感染症に対する基本的知識、対策等のシステムを構築できるようにさせる。</p>
内容例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 利用者の安全に配慮し、介護事故や感染症を起こさないための基本的な視点・知識・技術を習得させる ・ 用語の定義の理解 <ul style="list-style-type: none"> ・ 介護事故・インシデントの定義 ・ 介護事故と介護過誤(自己責任と過失)等 ・ 事故に対する基本姿勢 ・ 介護保険法での規定 ・ 身体拘束廃止 ・ 虐待防止法 ・ ハインリッヒの法則の理解 ・ 感染症予防について ・ 環境及び生活のなかのリスクと対策 ・ 利用者の豊かで安全な生活を支えるためのセーフティマネジメントのシステムについて学び、リーダーとしての役割を理解させる ・ チームとしてのセーフティマネジメント <ul style="list-style-type: none"> ・ サービスの標準化 ・ リスクマネージャーの役割と予防のためのシステムの構築 ・ 事故報告書への記録と報告の重要性について知る ・ 利用者・家族とのコミュニケーション（契約時における情報提供と同意） ・ 事例演習などから事故要因分析と再発防止策の検討を行う ・ 介護事故事例、ヒヤリ・ハット事例の要因分析手法を理解させる(介護事故事例の要因分析手法のグループ演習) ・ 自職場などの事故防止・対策における業務マニュアルの作成及び見直しを行う ・ 日常生活に潜む危険を感じとるセンスを高めることの重要性を理解させる(KYT「危険予知トレーニング」のグループ演習)
事前課題例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自施設におけるセーフティマネジメントの理念や取り組みをまとめる。 ・ 自施設における事故・ヒヤリ・ハットが起きた後の対応、職場内でどのように共有したかについてまとめる。

講義の展開例

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)・演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
90分	(講義) セーフティマネジメントの基本的事項について	<ul style="list-style-type: none"> 用語の定義の理解 介護事故・インシデント 介護事故と介護過誤 事故に対する基本姿勢 介護保険法での規定 身体拘束廃止 虐待防止法 ハインリッヒの法則の理解 感染症予防について 環境及び生活のなかのリスクと対策 	
90分	(講義) 職員間における情報共有の重要性	<p>チームとしてのセーフティマネジメント</p> <ul style="list-style-type: none"> サービスの標準化 リスクマネージャーの役割と予防のためのシステムの構築 事故報告書への記録と報告の重要性について知る 利用者・家族とのコミュニケーション(契約時における情報提供と同意) 	
150分	(演習) 介護事故事例の要因分析手法のグループ演習	<p>事例を通じた、SHELモデルによる事故の分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 介護事故事例、ヒヤリ・ハット事例の要因分析手法を理解させる 	ツールを使っての分析方法を身につける
90分	(演習) KYT「危険予知トレーニング」のグループ演習	<p>日常生活に潜む危険を感じとるセンスを高めることの重要性を理解させる</p> <p>事例を通じ、KYTのグループ演習を行い、再発防止のための予防策を考える</p>	自職場における危険箇所に対する対処方法を身につける

10 問題解決のための思考法

科 目 の 目 的	問題解決のための着眼点と発想の技法を学び、業務で活用できるようにする。 業務改善の取り組みや新しい活動について企画・提案できるようにする。 実践をまとめ、的確にプレゼンテーションできるようにする。
-----------------------	--

行 動 目 標	<p>知識の獲得</p> <p>問題解決のための着眼点と発想の技法を学び、業務で活用できるようにする。 問題の整理方法と、チームで具体的な解決策を見出す方法を身につける。</p> <p>技能の獲得</p> <p>高齢者・障がい者等、ケアを必要とする人々の支援に取り組む実践リーダーとして、介護現場の環境を整えるために、多面的な視点、着眼点、発想から、職場の問題点・課題を分析し、解決に取り組むための指針を得る。 業務改善の取り組みや、新しい活動について企画・提案できるようにする。 課題を一つに絞り、その改善のための「企画・提案書」(達成目標・改善目標・行動目標・実行計画)を作成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・より質の高いサービスとするために、限られた人員・財源・時間等の資源を効率的・効果的に活用しようとする姿勢をもち、常にチームの業務の見直しを行うことができる。 <p>遂行</p> <p>多面的な視点、着眼点、発想から、職場の問題点・課題を分析し、解決に取り組むことができる。サービスのあり方や組織、経営について問題意識をもち、業務改善を企画・提案し、具体的な取り組みが行える。 各事業所の提案書を持ち寄り、課題別グループ討議を行い、KJ法やブレインストーミングにより、企画・提案書の精度をバージョンアップさせる。 問題状況について可視化、構造化し、その内容を的確にプレゼンテーションする。 グループごとにまとめられた「企画・提案書」をプレゼンテーションする。 実践をまとめ、的確にプレゼンテーションできる。</p>
------------------	--

修 了 時 の 評 価 ポ イ ン ト	<p>知識</p> <p>問題解決のための発想技法を説明し、実際に用いることができる。 問題状況について多面的に整理し、その内容を自己および他者に理解可能な形で伝達することができる。 効果的なサービスを提供するために業務の効率化を図ることと、必要な費用を削減することの相違について、具体例に基づいて説明できる。</p> <p>技能</p> <p>グループごとにまとめられた「企画・提案書」に基づきプレゼンテーションする能力が身についている。 自職場のサービスや組織運営に関する課題やその解決の方向性について分析し、説明</p>
--	--

できる。

課題を1つに絞り、その改善のための「企画・提案書」(達成目標・改善目標・行動目標・実行計画)を作成することができる。

各自が提案書を持ち寄り、課題別グループ討議において、KJ法やブレインストーミングをつかうことができ、「企画・提案書」の精度をバージョンアップすることができる。

遂行

特定の事例について、課題発見や解決方法を活用し、グループで解決策についてまとめる。

介護にかかわる内容について、問題解決を図り、提案、プレゼンテーションができる。業務にかかわる内容で、企画、提案、プレゼンテーションが実施できる。

<p>指導の視点</p>	<p>一般的な定義(「あるべき姿」との差)だけでなく、介護現場特有の「問題」(「あるべき姿」を言語化しづらい、個々の価値観が先行するなど)があることも併せて説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題 = 困難事例だけにならないように ・問題 = 設置基準に達していない項目だけにならないように ・問題 = 介護事故だけにならないように <p>一般的な方法論の紹介だけでなく、ひとつの事例を用いて発想法の違いでどのように異なるか等を説明する。</p> <p>表面的な問題だけでなく、背景要因も含めて分析する。</p>
<p>内容例</p>	<p>講義</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「問題」の捉え方 <ul style="list-style-type: none"> * 問題とは何か・定義・基本的要素 * 問題の可視・認識について * 問題の分析、解決を図るには、多面的な考え方が必要 * 問題の存在をどのように考えるか？ * どのように問題を把握するか？(帰納・演繹法) * なぜそれが問題と考えるか？ <ul style="list-style-type: none"> 個人的価値、 社会的価値、 専門的価値、 普遍的価値 * 問題の性質 <ul style="list-style-type: none"> 誰にとっての問題か、 緊急性・重要性、 効率性・効果性 * 問題解決への見通し <ul style="list-style-type: none"> 過去に類似の事例があるか、 現実性、 困難性 ・ 「問題」の種類 <ul style="list-style-type: none"> * 問題の分類(課題解決型・課題達成型)(発生型問題・改善型問題・構想設定型問題) ・ 問題解決のプロセス把握 ・ 各種問題解決技法の解説 <p>演習例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「職場にはどのような問題があるか」事例やテーマに基づいて経験する ・ 「コップの使い方」演習問題の話し合い ・ グループ演習：1つのチーム内で1つの問題を選択、学習した技法を用いてチームとしての問題分析、改善計画を立てる。1グループ15分以内で発表する ・ 事例に基づき介護事故の予測、介護事故の原因分析と再発防止策(住環境と福祉用具の活用等を含む)の立案を行う演習を行う ・ B S 法、K J 法を用いて参加者一人ひとりが自職場の問題を掘り起こす ・ セブクロスの手法を使って、各人が掘り起こされた問題項目を整理し、問題解決の優先順位をつける ・ グループワークで優先順位の高かった問題となっているものを選び、具体策を盛り込んだ実行可能なプランを立案する ・ 発見した課題についてその解決策を考える ・ 各グループの作成した職場の問題点についての改善実行プランを発表し課題の共有化

	<p>を図る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ グループ内で職場内の問題を1つ選ぶ。テーマ設定 ・ 職場内の問題の原因を特定(分析)・解釈し、業務改善の取り組みや新しい活動に対して「効果的なとるべき手段」(改善方法の決定)を活用し、方向性を考える
事前課題例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の職場内における問題を一つ取り上げ、具体的に記したうえで、その背景要因の分析も行う。 ・ 自分が考える「問題」とはどのようなものかを書き出す(介護・福祉といった分野や、組織・地域・社会などに限定しない)。思いつく事柄を10件ほど書き出してくる。 ・ 自分が経験したケア場面における問題について記述してくる。

講義の展開例

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)・演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
30分	(講義) 問題とは	問題とは何か・定義・基本的要素	
30分	(講義) 問題の種類	問題の分類(課題解決型・課題達成型、発生型問題・改善型問題・構想設定型問題)など	
30分	(講義) 問題解決の基本的プロセス	問題の構造の把握 仮説の作成、検討 解決策の実施・評価	
90分	(講義) 各種問題解決法の紹介	発想・創造 計画・実行 考え方・思考技術 QC的道具 要因分析 その他	
150分	(演習)		
30分	まとめ		

11 介護職の健康・ストレスの管理

科目の目的	<p>利用者へ質の高い介護サービスを提供できる介護職員として、心身の健康管理のあり方やその予防方法を学び実践できるようにする。</p> <p>自分自身や後輩等に心身面の問題が発生した場合、チームリーダーの役割として適切に対応できるようにする。</p> <p>適正な健康管理に関する知識をもち、職場内での心身の健康管理体制について改善策を示し実施できるようにする。</p>
-------	---

行動目標	<p>介護職の職場における心身の健康管理に関する基本的知識を習得するとともに説明できることをめざす。</p> <p>介護職員の身体的問題（腰痛等）の発生要因、予防法としての具体的な介護技術の展開などを通して、健康管理の重要性と考え方について説明できるようになる。</p> <p>メンタルヘルスケア（精神的ストレスの理解とその予防方法）の理解を深め、介護職員の健康を守るための法令・規則について説明できるようになる。</p> <p>介護の職業上での健康問題について知識と改善・対策について指摘できるようになる。</p> <p>介護職場の基本的な労働安全衛生管理の法令・規則について理解し、自職場における労働安全衛生・健康管理の課題とその解決方法について分析を行い、改善策について取り組むようにできる。</p> <p>セルフプロモーションを理解して実践することができるようになる。</p> <p>介護職員として介護の理念（尊厳を支えるケア、自立支援）と介護職員の健康を守ることを総合して実践することを身につける。</p>
修了時の評価ポイント	<p>介護職の職場における心身の健康管理の留意点・ポイントについて説明できる。</p> <p>介護職員に起こりやすい疾患・健康問題とその予防法について説明できる。</p> <p>身体に負担のかかる介護の具体例などについて、何が問題か具体的に指摘できるとともに、身体に負担をかけないためにどのような方法で介護を行うべきか説明できる。</p> <p>メンタルヘルスケア（精神的ストレスの理解とその予防方法）について知識を深め、セルフケアや職場での人間関係等の環境改善に努めることができる。</p> <p>介護職員の精神的健康を守るための法令・規則について説明できるようになる。</p> <p>介護職場の基本的な労働安全衛生管理の法令・規則について説明できる。</p> <p>自職場における労働安全衛生・健康管理の課題とその解決方法について分析を行い、改善策について取り組むようにできる。</p>

指導の視点	<p>介護職員の心身の健康保持、健康増進への意識向上をはかる。</p> <p>介護の職場における心身の健康管理に関する基本的知識の習得をめざす。</p> <p>介護の職業上での健康問題の知識と予防対策について指摘できるようになる。</p> <p>介護職員の身体的問題（腰痛等）の発生要因、予防法としての具体的な介護技術の展開などを通して、健康管理の重要性と考え方を説明できることをめざす。</p> <p>メンタルヘルスケア（精神的ストレスの理解とその予防方法）について知識を深め、介護職員の健康を守るための法令・規則について説明できるようになる。</p> <p>介護職場の基本的な労働安全衛生管理の法令・規則について理解し、自職場における労働安全衛生・健康管理の課題とその解決方法について分析を行い、改善策について取り組めることをめざす。</p> <p>グループワークなどで課題抽出、要因分析、改善策の協議のプロセスを体験できるようにする。</p>
内容例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 心身の健康に関する基本的知識を学び、セルフプロモーション理念などセルフケアと健康増進の最近の動向を理解し、健康への意識向上をはかる ・ 介護職員に起こりやすい疾患・健康問題とその予防法について理解を深める ・ 健康上の問題をもった介護職に関する事例にもとづいて、介護職の健康管理についてグループで検討する ・ 職場での腰痛発生状況、介護方法、勤務体制など職場での予防対策を考える ・ 腰痛予防対策指針等についての情報と腰痛予防の具体的方法を展開する ・ 労働安全衛生にもとづく職場環境改善に関する知識を理解する ・ 労働基準法 64 条、女性労働基準規則、職場における腰痛予防対策指針等の重量物取り扱い制限などを理解して、改善策をさぐる ・ 労働安全衛生法に基づくメンタルヘルスケアについて理解する
事前課題例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分自身や職場仲間がもつ「介護の仕事による健康上の問題（腰痛、ストレスなど）」について、その状況、原因、どのように対応・解決したのか、職場での取り組みについて具体的にまとめて記述してください。 ・ 介護職員の健康上の問題として腰痛が多くあげられます。自職場における腰痛に関する実態、特に、どのような状況、どのような要因で起こるか、それに対する職場での取り組みについてまとめてください。 ・ 職場で感じるストレスについて、これまでの ストレスの内容（介護業務、利用者との関係、職場の関係など）について、その解決方法や結果などについてまとめてください。 ・ 新人のころ仕事をするうえで、利用者との関係、職場の関係などで、一番悩んだことやストレスに感じたことを思い出し、具体的な状況（悩んだこととその状況、なぜ悩んだか、その解決方法や結果など）についてまとめてください。また、リーダーとして今の自分ならどのように新人の相談に対応するかを考えてください。

講義の展開例

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント・(中小項目) 演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
20分	健康とは	健康に対する意識 健康の概念、健康観について確認する。	・ 各自の健康観を表現する 健康の定義、健康管理の動向、ヘルスプロモーション定義
40分	健康に関する知識	心身の健康に関する基本的知識 健康に関する動向、予防の重視	・ 自分の心身の状態から人間の心身についての知識を理解する。
40分	介護職員の健康障害	介護職員に発生する疾患・健康問題とその予防法 ・ 腰痛などの身体症状の理解とその予防法 ・ 感染症の理解とその予防法 ・ 夜勤・交代性勤務による生体リズム変調の理解とその予防方法	・ 健康増進法(平成14年法律第103号)
60分	グループワーク		事前課題レポート：自職場での介護職員の健康問題と取り組み
40分	腰痛防止	介護職員の腰痛の発生要因と腰痛予防の対策 ・ 職場での腰痛発生の実態 ・ 腰痛予防に関する知識 ・ 腰痛の要因、防止対策、具体的場面の介護技術について演習する ・ 福祉用具、負担軽減の介護技術	「職場における腰痛予防対策指針」 ・ 腰痛予防体操 ・ DVD鑑賞 腰痛防止の移動、移乗介護技術 福祉用具活用
40分	メンタルヘルスケア	メンタルヘルスケア(精神的ストレスの理解とその予防方法)について理解を深める。 ・ 対人援助職特有のバーンアウト ・ うつ症状(軽度)の理解 ・ 利用者・スタッフ間、管理者との人間関係によるストレス管理	・ 介護労働者のストレスに関する調査結果(介護労働安定センター) ・ 労働者の心の健康の保持増進のための指針(労働安全衛生法第70条の2第1項に基づく指針) 職場でのストレスとその対策
50分	グループワーク		

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント・(中小項目) 演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
30分	健康管理・労働関係の法規	介護職員の健康を守るための基本的な健康管理・労働関係法規について学ぶ。 介護職員の健康に関連する法令 ・介護保険法の介護業務の規定 ・労働基準法、健康増進法の知識	<ul style="list-style-type: none"> ・労働基準法（昭和22年4月7日法律第49号） ・労働安全衛生法（昭和47年6月8日法律第57号）
20分	まとめ		

12 自職場の分析

科 目 の 目 的	<p>職場改善手法の理論や展開方法について学ばせる。</p> <p>自職場のサービス、組織、マネジメントの課題を把握・分析させる。</p>
-----------------------	---

行 動 目 標	<p>姿勢・知識の獲得</p> <p>チーム運営に主体的にかかわり、サービスの提供体制や、組織運営についての課題を客観的に把握、分析しようとする姿勢と視点を有することができる。</p> <p>効果的なサービスを提供するために業務の効率化を図ること、必要な費用を削ることの相違について、具体例に基づいて説明できる。</p> <p>介護の理念と介護報酬の関係に基づき、継続的に良いケアを展開するための経営のあり方を説明できる。</p> <p>分析力</p> <p>多角的な視点、着眼点、発想から、職場の問題点・課題を分析し、解決に取り組むことができる。</p> <p>より質の高いサービスを実現するため、常にサービスのあり方や組織、経営の現状について問題意識をもち、職場の現状について適切な分析を行うことができる。</p> <p>実行力</p> <p>サービスのあり方や組織、経営について問題意識をもち、業務改善を企画・提案し具体的な取り組みが行える。</p> <p>業務改善の取り組みに当たっては、多面的で効果的な方法から問題や課題の背景を分析し、それらに対する有効な解決策を提示することができ、チームの中心として解決策を実践することができる。</p>
修 了 時 の 評 価 ポ イ ン ト	<p>概論的なこと</p> <p>質の高いサービスを提供するための継続した業務改善の必要性和、それを担保する組織運営のあり方について包括的に説明することができる。</p> <p>介護の理念と介護報酬の構造の関係に基づき、継続的により良いケアを展開するための経営のあり方を説明できる。</p> <p>具体的なこと</p> <p>自職場における人事・労務・健康管理等の課題を把握・分析し、具体的な解決方法をいくつかの視点から提示することができる。</p> <p>自職場のサービスや組織運営に関する課題を把握・分析し、具体的な解決方法をいくつかの視点から提示することができる。</p> <p>人事・労務・健康管理について、自職場における自分への期待と役割について説明できる。</p> <p>効果的なサービスを提供するための業務の効率化を図ることと、必要な費用を削減することの相違について、具体例に基づいて説明できる。</p>

<p>指導の視点</p>	<p>中堅職員として「自職場を分析すること」は業務のひとつであること。 自由な発想から自職場を分析することも必要であるが、与えられた枠組みのなかでどうするかという視点も重要。 分析するに当たっては、現状についての正確な理解が必要であること。 ビジネスで用いられているような一般的な手法から介護現場に適した手法まで網羅的に。 目的に応じて、適切な手法が選択できるように。 手法の解説だけでなく、具体例を挙げて実際に分析をしてみせる。 注意したいこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 講師の側から一般的な自職場の課題を決めないこと。 （人材不足、ストレス管理についてなど） ・ 表面的な課題だけでなく、背景に潜む課題まで分析する。 ・ 他者が聞いて、その職場の課題を理解できるプレゼンができるかどうか。
<p>内容例</p>	<p>講義</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 総論 <ul style="list-style-type: none"> * 職場分析の必要性、意義 * 現状把握と情報共有化の必要性 * 求められるサービスの質の向上 * 役割と動機づけ * 専門職としての介護福祉士が自職場の分析を行うことの意義 * 職場改善の意義と、チームのなかでの役割を自覚させる ・ 各論 <ul style="list-style-type: none"> * 業務改善の基本を知る * 問題の種類と解決ステップ * 自職場を分析するに当たっての評価の確認ポイントの説明 * 可視化と構造化による多様な事柄の整理 ・ 具体的な手法について <ul style="list-style-type: none"> * 職場分析の方法 * 原因分析のポイント * 解決策の導き出し方 * 改善計画書の作成方法 * プレゼンテーション技法の習得 <p>演習例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事前学習をもとに、自職場の優れている点、問題点を整理しながら、福祉サービスの基本理念が、自職場の運営理念や組織図の中に具体化されているか考えさせる ・ 「課題」の大小の区別を行い、「解決しやすいもの」「困難なもの」を抽出 「解決方法」を検討する ・ 事例課題（事前課題として出題した内容）について、個人作業及びグループワークによって問題解決を図り、個人作業についてワークシートを作成する

事前課題例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自職場の解決すべき問題を3つあげ、それが問題であると思われる理由と改善法について記す。 ・ 「問題解決の手法」を用いて自職場の「サービスや組織運営に関する課題」を分析する。 ・ 自職場の課題・問題点・弱点・改善すべきと考える点を20個以上、自職場の長所・良い点・自慢・伸ばしたいと考える点を20個以上を書き出してくる。 ・ 職場の組織図・パンフレットに目を通し、組織の現状や理念を理解する。 ・ 東京都福祉サービス第三者評価の分析シート（事業プロフィール・組織マネジメント分析シート・サービス分析シート）を事前に配布し、記入する。 ・ 自職場における受講生の、自職場の強み（他事業所と比較して）・特徴および課題と感じられることについて振り返り、書き出してくる。 ・ ケア場面において「おやっ？」と感じたこと（どのような事柄でもOK）を写真に撮り、コメントをつけカード化してくる。
-------	---

講義の展開例

時間	テーマ(展開)・大項目	講義・解説のポイント(中小項目)・演習等の展開内容	使用教材、指導上の留意点、備考等
20分	(講義) 自職場分析の目的		
30分	(演習) 自職場分析の経験を問う	参加者間で経験を共有する (大規模なものから小規模なものまでであることを知る)	
20分	(講義) 自職場分析を行う役割と動機づけ	介護福祉士が自職場分析することの意義	
20分	(講義) 基本的な考え方の解説	現状分析の基本 自職場分析するための確認ポイントなど	
60分	(講義) 具体的な自職場分析手法の解説		改善計画書の作成方法も含む
120分	演習	自職場の優れている点、問題点を多面的に整理する	事前課題をもとにすること
90分	発表	自職場課題に関するプレゼンテーションの実施(個人・グループ)	

3

指導法のポイント

1 講義のポイント

1 講義の特性

講義は、講師が担当科目の概念、知識、技術を整理して、受講生に伝達するのに適しています。しかし、講義は一方的な伝授になり、受講生との双方向的コミュニケーションをとりにくい面があるため、講師が教えたつもりになりやすい特性があります。

2 講義の事前準備

担当科目がファーストステップ研修でなぜ必要なのかを押さえておき、指導案を作成します。教授する科目の目標を設定し、受講生の事前課題レポートを読んでおいたり、教材などを調べておき、行動目標を意識しながら、どのような教授方法にするかを決め、講義のどの部分を講義法で行うのか、討議や演習を入れる場合はどこに入れるかを検討しておきます。

講義形式で講義することを決めたら、より詳細な指導案を作成します。何をどのように提示し説明するか、その順序や例示をどのように挿入するか、受講生の興味や関心をどこで確かめるかを考えておきます。他の科目との関連も視野に入れておきます。

3 プリント、パワーポイント

講義をわかりやすくするものとして用意します。

4 講義の時間

講義を時間通りに開始し、講義の終わりに質疑時間がとれるように時間的余裕を

もたせたうえで、定刻に終わります。

5 講義の進行

初めに講義全体を紹介し、体系的に進め、目標を明確にします。重要な点は繰り返すか、言い方を変えて、できるだけ具体的に、リアルにイメージができるように説明します。最後に、全体をまとめ、重要な点が何かわかるようにします。

6 講義の展開

受講生の反応を敏感に受け止め、好ましくない反応を認めたら、その原因を自身に振り返ってみます。受講生が講義に参加していると実感できる工夫をしましょう。質問ができる雰囲気づくりをし、興味を刺激する、説明に合うような事例や体験談を取り入れたり、受講生の自主性や意欲を引き出すよう、質問を投げかけたり、参考文献の紹介などをしましょう。

7 講義の振り返り

講義が終わったら、講義中に起こったこと、気づいたことを振り返って次回に役立てましょう。受講生が熱心に聞いていたところ、反対につまらなそうにしていた部分はどこか、点検を繰り返しながら、講義の良い点や改善すべき点を明らかにし、指導案を修正していきます。

講義のスキルを高める努力をしましょう。

課題についてのポイント

ファーストステップ研修は、「研修の場」と「実践の場」とが循環する学習の仕組みになっています。

事前課題では、介護福祉士として介護実践にどのように取り組んでいるのか、組織のなかでどのような働きをしているのか等、自らの実務経験を振り返らせます。こうして、その科目の基本となる概念を予習したり、考えをまとめることで、受講生は研修に対する学習意識が明確になります。

事後課題では、研修で学んだことをまとめる、あるいは研修で学んだことを活かしながら自分の職場の課題をまとめるといった課題を与えます。介護福祉士としての質の担保ができ、自職場の活性化が図れるような内容を考えていきます。

(是枝 祥子)

2 演習のポイント

1 演習(グループ討議法)

グループ討議法は、講習会や研修において少人数制で、ある特定の題目について報告を準備し、これに基づいて全員が討議する形態を指すことが多いです。この展開は、受講者に受け身ではなく能動的、自主的であることを促し、受講者が創造的思考をしたり、活動的に参加できるようになります。

グループ討議では、グループメンバーが相互に意見を交換しながら一つの結論を導き出すようにしていきますが、受講者一人ひとりの個性、行動が生かされ、思考が促進し主体的に活動できることが大切にされます。

グループ討議により、参加者は言葉の意味を吟味して用いることを意識するようになり、批判的な考えやその対処について学ぶこともできます。また、現場経験からの知識を持ち寄ることなどにより、専門職としての知的水準も向上します。

2 方法・手順

① 方法

講師はテーマを選びます。

参加者6～7名を1つのグループに構成します。グループ数に応じて、指導講師が複数いることが望ましいでしょう。

集中して討議できるように、隣のグループと距離を離します。

開始時間や終了時間を明確にします。

司会・書記を決めます。

② 手順

同じ資料(例えば、事前課題をグループ討議の教材にする場合)をグループ全員が読みます。このとき各自で討議の内容範囲内で疑問点、質問項目等を明らかにします。

司会者は、時間内で重要な点を十分検討できるようにします。

書記担当者は、討論で明らかになったこと、課題として残されたこと等を記録します。

講師は、指導者としてあるいは相談者として行動し、専門的な領域から受講者の助けとなるような助言を行います。

討議で明らかになったことや課題について全体発表し、学習の共有を図ります。

(佐藤 富士子)

3 課題レポート作成のポイント

1 事前・事後課題の目的・方法

自職場における実践や課題を研修での学びに関連させてより学習を深めます。

事前課題は、研修での演習テーマにそって、自らの実践の課題や自職場の課題等の実態調査、状況把握を行うなどの方法が考えられます。

事後課題は、研修で学んだことを通じて、課題を明確にし、改善に向けて取り組んだ自職場での実践とその結果についてまとめるなどの方法が考えられます。

2 「事前課題レポートの書き方」のポイント

- ・ 文字数が指定されている場合は、その範囲内にまとめて書く。
- ・ 課題内容にそった内容のレポートになっているか確認する。
- ・ 誤字、脱字など基本的な間違いがないか確認する。
- ・ 文章構成が整っていて理解しやすいようになっているか確認する。
- ・ 読後感想が事前課題の場合は、書籍の内容、著者の主張から自らの実践を振りかえり、自分の体験とそれに基づいた感想と考えについて書く。
- ・ 事例をまとめる場合は、必要な利用者の情報を事例概要（フェイスシート）にして、事例内容を利用者の言動、対応など具体的場面が再現できるようにまとめる。ただし、利用者の個人情報等の保護に十分配慮する必要がある。
- ・ 自職場での実態や課題をまとめる場合は、実態調査（対象、方法、期間等）の結果を簡単にまとめておく。また自職場の状況把握の根拠と結果をまとめて記述する必要がある。

（上之園 佳子）